<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>タイトル</td>
<td>ホームレスとジェンダーの社会学 要旨</td>
</tr>
<tr>
<td>作者</td>
<td>丸山 里美</td>
</tr>
<tr>
<td>発行機関</td>
<td>京都大学</td>
</tr>
<tr>
<td>発行日</td>
<td>2010-11-24</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/2433/131871">http://hdl.handle.net/2433/131871</a></td>
</tr>
<tr>
<td>タイプ</td>
<td>論文</td>
</tr>
<tr>
<td>版</td>
<td>none</td>
</tr>
</tbody>
</table>

京都大学
京都大学

博士（文学）

氏名

丸 山 里 美

論文題目　ホームレスとジェンダーの社会学

（論文内容の要旨）　

本論文は、従来の研究で見落とされた女性のホームレスの存在に着目し、なぜ彼女たちが見落とされてきたかを検討することを通じて、ホームレスの多面性と特性に基づき、現代社会における貧困とジェンダー問題に新たな視角を提供することにある。

近年日本では、貧困や格差が大きな社会問題になっている。1990年代以降にあらわれた野宿者に加え、最近では産業構造の転換にともなって、若年層の貧困が深刻化している。その中で、住居の喪失をともなう貧困を、本論文では広くホームレスと捉えている。

このホームレスには、大きな特徴がある。それは、ほとんどが単身の男性である、ということである。実際、野宿者のうち女性は3％にすぎない。だが野宿者だけに限らず、住居の喪失をともなう貧困を広く考えるならば、女性のホームレスも少なくない。しかしこれまでのホームレス研究は、暗黙のうちに男性を前提にしていた結果、女性のホームレスの実態についてはまだ実証的な研究が蓄積されていない。

本論文では、この女性ホームレスについて、路上における調査と、福祉施設における調査から、実態把握を行った。そしてその女性固有的経験をもとに、ジェンダーを分析視角として加えることで、ホームレス研究を再検討する作業を、以下のように進めた。

第1章「女性ホームレスの民族誌に向けて」では、社会学のホームレス研究を批判的に概観した。寄せ場の人々を改良されるべき客体と考える社会病理学を批判し、ホームレス研究は日雇労働者やホームレス自身の主体性を抵抗に着目してきたが、それは賃労働する男性を前提にしており、女性労働してないホームレスを排除するものであった。同様にホームレスとなることも多い売春女性の研究でも、保護されるべき客体としての女性と、自ら主体的に売春を選びとする女性、という二つの対立的な人間像が見られる。しかし女性ホームレスをとらえるには十分ではない、この二項対立的な見る方に陥らないために、本論文では、ジェンダーを主体に絶えずの言説実践の過程とらえる、ポスト構造主義のジェンダー研究の視点を検討し採用した。

第2章「女性ホームレスとは」では、本論で用いるホームレスの定義を、欧米の研究を参照しつつ定めたうえで、なぜ女性は野宿者ではなく「隠れたホームレス」になりやすいのかを検討した。日本の労働市場と社会福祉制度は近代家族を前提としているために、男性パートナーがいない女性は貧困に陥りやすい一方で、貧困女性を対象と
した福祉制度が男性と比較して多く存在しており、住居を失ったホームレスの女性は福祉施設に入所することが多い。さらに、ホームレスになった33人の女性の生活史を検討し、従来の研究で分析の中心とされていた労働だけではなく、家族関係にも着目しながら、その特徴を男性ホームレスと対比させて把握することを試みた。

第3章「女性を対象とした福祉体制の成立の歴史」では、貧困政策の中で女性がどのように扱われてきたのかを、20世紀初頭の社会事業成立期から現在に至るまで、大阪府を例に、歴史社会学的に検討した。構築主義的にとらえると、何か貧困であるかは政策によって定義されるともいえるが、貧困女性は福祉政策においては、母子世帯の母として保護されるか、売春婦として罰せられるかのいずれかとして、近代家族の規範を模倣ないしは掛敬されており、その福祉体制が現在まで続いていていることが明らかになった。

第4章「福祉施設の利用とジェンダー規範」では、女性ホームレスが暮らす東京の福祉施設での調査から、福祉制度を活用する際に従うことを求められる規範とは何かを検討した。3章で見たように、貧困女性を対象にした福祉制度は、近代家族の規範に沿った体系として存在している。しかしその制度が適用される現場の相互作用に着目すると、ジェンダーに関係する期待は、順守することを期待される数ある規範のうちの一部にすぎず、日常生活の場面では、制度の体系とは異なり、必ずしも「望ましい女性像」に沿った支援が行われるわけではないことがわかった。

第5章「女性宿者の生活世界」では、女性宿者の生活実態を明らかにしている。東京の公園での12ヶ月間の調査にもとづいて、女性宿者が衣食住をどのように確保し、どのように危険に対処し、人間関係をつくるといった事を考察した。

第6章「野宿をする且つ野宿を脱すること」では、女性宿者が、野宿生活をどのように意味づけているかを見つめ、彼女たちが野宿を続けるか、野宿生活を脱するかを決めていく場面に着目した。女性宿者たちは、これらの重要な決定をするとき、身近な他者の存在をぬくに考慮しており、その結果として野宿生活を脱出したり、また野宿に戻ることを繰り返したりしていた。これは、従来の男性を中心にしたホームレス研究で描かれてきたような、自立した宿者が社会への抵抗として野宿をすること、という姿とは大きく異なる。

第7章「変化のプロセス」では、女性宿者たちの変化に着目している。大阪で筆者が自身も参与してきた女性宿者の支援グループでの活動事例から、長期間にわたる調査を行えば、周囲の人間関係や環境の変化の中で、女性宿者たちの意志や行為も変わっていくことが示された。また本人を、自分の意志やニーズを十分に把握できないこともある。これらもまた、従来の研究に見られる、自立した主体の主体のとらえ方ではないことのできない、ホームレスの姿である。

第8章「主体化に力がある」とでは、抵抗や主体性に着目する研究の視点が、そして女性ホームレスの排除につながってきたか、そこで何が見落とされてきたかを、キャ
ロール・ギリガンの「ケアの倫理」論を軸に整理した。従来のホームレス研究においては、個人の権利を重視する自立した合理主義的人間像をモデルとして成立してきた。しかし現実には、女性はしばしば錯綜した利害・責任や人間関係に配慮する結果、研究や権利の主張を前提とする福祉制度の利用から排除されてしまう傾向があることを述べた。

結論において本論は、女性ホームレスの流動的で柔軟な生活世界の分析を通して、自律した合理主義的男性主体の存在を暗黙の前提とする従来のホームレス研究の枠組み自体を批判的に乗り越え、路上、施設、一般住居の世界を可逆的に往来しながら緩やかな共同性の創造していく過程としてホームレスの生を定位しなすことの意義を確認した。
（論文審査の結果の要旨）
本研究は、現代日本社会の女性ホームレスを対象にして、貧困とジェンダーについて社会学、社会福祉学、ジェンダー研究の視点から実証的かつ批判的な分析を試み大きな成果をあげた独自的な論考である。また本研究は、2002年以降、東京繁華街の公園における野宿生活や社会福祉施設への長期の参与観察を継続するなかで記述された優れた都市民族誌でもある。

本研究が社会学のホームレス研究に与えた貢献は以下の3点に要約できる。第一は理論的貢献であり、第二は方法論的貢献、そして第三の貢献は女性ホームレスの生活世界の錯綜性を解明した実証的な意義である。

日本における路上生活あるいは寄せ場研究は、1970年代までは社会病理学的パラダイムによって支配されてきた。そこで路上生活者や寄せ場生活者は、主流社会から脱落し全体社会秩序に対する「骨威」あるいは「病理」とみなされ、社会的管理統制や慈善救済の対象とされてきた。しかしながら1980年代以降、こうしたパラダイムは厳しく批判され、路上生活者を「創造と抵抗の主体」とする新しい見方が登場した。本研究は、こうした研究史のなかから女性ホームレスが排除されていったことに着目し、「創造と抵抗の主体」パラダイムが、男性日雇い労働者を暗黙の前提とする点を根拠に問い直した。またアメリカの女性ホームレス研究においては、男性労働者中心主義を批判してジョアン・パサロなどが、ジェンダー化された女性ホームレス研究を提唱しているもの、こうした研究さえも路上生活を「選択」した女性ホームレスを、「ジェンダー（規範）に背く者」として例外的特権的にとらえている。本研究は、こうした視点をも批判して、「路上生活を継続する」女性の錯綜した非特権的な生の可能性と限界を考察しようと試みる。それは、「創造と抵抗の主体」で「例外的特権的選択」でもない、社会の構造的弱者が日々許行錯誤を繰り返しながらつくりあげる生活実践のなかから事実的創発的に構成されるエージェンシーに着目するものである。

第二の意義は方法論的なものである。女性ホームレスの存在はこれまで不可視化されてきた。2007年の厚生労働省の調査によても、全体で1万8564人のホームレス人口のなかで女性の占める割合は616人と3％余りに過ぎない。これが女性ホームレスを無視し、男性労働者を中心にホームレス研究が行われてきた理由でもある。しかし本研究は、女性ホームレスを不可視化するメカニズムについて精密な分析を試みる。固定的なジェンダー意識によって、女性ホームレスにはさまざまな社会福祉上の援護制度が適用されており、彼女たちは母子療、DVからの助け込み施設、労働防止法上の保護施設などに滞在しながら、路上生活を継続している。したがって、こうした住居の喪失を伴う女性の貧困の総体をとらえない限り、女性ホームレスの問題の全体像を見失うことになる。本研究は、このような方法論的立場にたって、路上と施設の生活世界をフィールドとして包括的で統合的な調査を実施したのである。

本研究の第三の意義は、女性ホームレスの生活世界の錯綜性メカニズムを実証的に
解明した点にある。本研究の出発点となるフィールドワークは、2002年から2003年にかけて「公的宿泊施設」の臨時職員として行ったものと、2003年からのべ10ヶ月東京S区の公園で女性ホームレスと同居しながら実施した参加観察である。この二つのフィールドにおける住み込み調査によって、女性ホームレスが、路上生活と施設生活、そして賃貸アパート生活を流動しながら全体としてホームレスの生を営んでいく過程が鮮明に描き出された。彼女たちは、路上生活を抜け出し、一時的に施設で社会的適応訓練をうけていき一般社会に復帰していくという、これまでのホームレス研究で前提とされてきた図式とはまったく異なる実現がそこには確認できた。同時に、その現実は、彼女たちは路上生活を意識的に抵抗や文化創造の手段として選択し主体的な生を確立しているという、1980年代以降のホームレス研究をリードしてきたホームレス観とも明確に異なるものであった。

こうして本研究は、女性ホームレス自身が路上生活からアパート生活へという「社会復帰」の单一方向を志向していないこと、同時に路上生活を主体的に選択しているわけでもないことを明らかにした。彼女たちのホームレス世界は、社会性共同性をときに追求し、ときには積極的にそれを切断回避しながら、総体として創発的共同性を構築しこれを緩やかな居場所としてきたのである。

2002年に制定された「ホームレスの自立支援法」によると、ホームレスは、「就労する意欲はあるが失業状態にある者」「医療や福祉等の援助が必要な者」「一般社会生活から逃避している者」の3つのタイプに分類され、最後の最少のタイプを切り捨てたことが批判されている。しかし本研究が示したように、女性ホームレスの生活世界は、ほとんどが第三のタイプであり、本研究はこの世界のもつ複雑で多面的様相を正面から解明しようと試みた上で、これまでのホームレス研究史に新しいページを開くものとして評価できる。

とはいえ本研究に問題がないわけではない。まず、女性ホームレスを一方的な受難者「客体」、あるいは、自律し創造抵抗する「主体」としてとらえるのではなく、事後的あるいは遂行的に構成される創発的エージェンシーとしてとらえるというが、創発性が生成される現場と効果についての議論が不十分で、創発性がたんなる授与の如く用いられる箇所が散見される。さらに、路上施設アパートの流動過程という女性ホームレスを特徴づける本論のエッセンスに、調査者が存在の存在かどのように介在し影響を与えた（あるいは与えなかったのかというフィールド調査法の自省的検討が不足していることは否定できない）。しかしながらこうした問題点は、後の研鑽のなかで十分克服できるものであり、本論の意義をいささかも損なうものではない。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2010年5月14日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について試問した結果、合格と認めた。